



〈全力で、守るから〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

赤ん坊を授かった時、お腹の子に向かつて大抵の母親はこうささやく。「どうか元気で、無事に生まれてきてね」と。写真の彼女には、殊の外その思いが強かった。「全力で守るから、だからどうか、無事に生まれてきてください」と。それは願いたいというよりはもう折りだった。―彼女とは、この映画を作った海南友子監督である。なぜ殊の外、この思いが強かったのか。それこそ、彼女がこの映画を撮った理由である。

海南監督は、これまで一貫して環境問題や社会の片隅で逆境に生きる人々に焦点を当てた作品を発表してきた。数々の国際映画賞も受賞している。東日本大震災後、あらたに福島を取材地に、福島第一原発から四キロ地点に迫るなど精力的に取材を進めていた。予期せぬ妊娠を知ったのは、その最中であつた。不妊治療の末に、とうにあり始めていた初めての妊娠だった。

驚きとうれしさと誇らしさ。だがその一方、言い知れぬ不安が押し寄せる。赤ん坊に放射性物質の影響はないだろうかと。それは、被災地で取材中に何度も聞いた、子どもの健康を心配する母親の気持ちそのものだった。それまでの被害者を取材する立場から、自らが被害者になつたのだ。もはや他人事ではない。海南監督はこの映画を、放射能の下で母親になることのすべてを自分事＝セルフドキュメンタリーとして赤裸々に描き出すことにした。もちろん母親といつても、ただの母親ではない。それまでには、大手マスコミの立ち入らない危険区域での、無人の商店街、置き去りにされた犬や猫、あてなくさまよう家畜の群れ、牛舎に横たわる餓死した牛の亡骸。一見美しい自然の野山には計測器を当てると針が振り切れるほど放射能が充満しているなどの衝撃の映像の現場に立つてき

たのだ。危険は承知、気をつけての取材だったが、まさかお腹に大事な我が子が宿つていようとは。

激しいつわり、救急搬送されるほどのお腹や腰の激痛は、年齢のせいなのか、それとも放射能の影響なのか。底知れぬ不安と罪の意識に苛まれる。水を飲んでも、深呼吸しても、すべて子どもへの影響を考えてしまう。この映画には、大きなおなかをハグ（HUG）しつつ、子への愛情と放射能との闘い、そして帝王切開による出産の様子までが丁寧に描き出されている。

海南監督は一九七一年三月二六日の生まれ。奇しくもそれは福島第一原発の運転開始と同じ日であつた。四〇年前のスタート時、今日の問題を誰が予想できただろう。事故までは原発の生み出す電力の恩恵を受けてきた我々である。「今後は、新しい命の未来をいかに守ってゆくか、多くの母たちと思いつなげたい」と力強く語っている。

映画の最後に元気に一歳の誕生日を迎えた坊や（長男）の映像がちらつと出てくる。よかった！上映会主催者を募集中。問い合わせは、ホライズン・フイーチャーズ（〇三―三三三三七―五一四〇）まで。



『抱く (HUG)』

日本／69分

監督：海南友子

3月5日より京都シネマほか全国順次ロードショー。